
神の代行人――その者の行く道は――

ハッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の代理人――その者の行く道は――

【Nコード】

N1041Y

【作者名】

ハッピー

【あらすじ】

その世界をたった一人で20年も生き抜いた少年……。その少年は別の世界で仲間――？がriを見つけ出す事ができるのか？少年はその世界で何を成すのか。神の代理人――その者の行く道は――物語はどう紡がれるのか？

この作品の作者は以前一つ作品を破綻しています。それでも読めるという方は温かい目で見守って下さい。

一話 中途半端な存在（前書き）

作者はガラスのハートなのでスランプになりやすいです。そこそこヨロシクドウゾ??

一話 中途半端な存在

その少年は心に壁を持っていた

数多の人間から拒絶され、

万物から好かれた、

少年は全てを理解し、

全てを理解出来なかった、

故にただの一度も理解されることはなく、

？がりもない、

少年は絶望に満ち希望に満ちていた、

それは彼の世界を崩壊させ、

やがて少年は独りとなり、

その心は悲しみに包まれていた。

この物語はたった一人の孤独な少年が紡ぐ物語・・・故にその物語の行く先はその少年にしか分からない・・・神の代行人――その者の行く道は――始まります。

二話 世界の分岐点

二話 世界の分岐点

そこは様々な風景が写し出されていた。
炎に包まれた戦争の世界。

生物は無く、ただ荒野が広がる世界。

科学が発展した平和な世界

レン・ルオカ・ギナンカことレンはそこで自分が行くべき世界を探していた。

普通の世界では世界が耐え切れず崩壊する。求めていたのは精霊のいる世界。精霊は世界を神の影響から守る緩衝材でもあり、また世界の一部である。

彼は自分の神格に耐えうる世界を探していた。その世界では孤独にならない事を信じて。

「やっと見つけた。この世界なら精霊も多いしな。……
……今度はあんな事にならなければいいけどな。」

？がりを求めた少年は新たな世界で？がりを得る事はできるのか？

二・五話 設定

レン・ルオカ・ギナンカ

見た目 両儀式の髪を灰銀色にし長髪にし赤目にした感じ

魔力 一応、ナギが1000だとすると100000くらいあるが精霊に好かれているため、魔力無しでも魔法が使える。

気

魔力と同等

前世では初対面の人でも何故か嫌われていたが、それは先祖返りで半神半人で周りよりも格が高すぎて周りは近寄ると異質な何かを感じ取り近づかなかった。二十歳位になると神としての記憶が蘇り、その神の中でも高すぎる神格に世界が耐えられなくなり、世界が壊れ死んだ。生まれた瞬間にアカシックレコードを偶然覗いてしまい代行人となった。能力はアカシックレコードを覗いた際に偶然付いた。本来代行人は百億回転生したものをテストしてなるためレンは異例として扱われる。代行人の仕事は不当な転生者の排除のみで何もない時は自由に出来る。

能力

並行世界の棚 様々な世界の能力を使える。
ただしその全容はまだわかっておらず少しか使えない。

神の眼
ゴットアイズ

多彩な魔眼が宿る。代償として一人としか結婚できない。

孤高の神格

精霊に好かれ、自然や動物から愛される。だが人間からは心が強い者でなければ好かれない

固有結界

???

三話 その世界は・・・

「ここはどこだ・・・」

レンは地に下り立った。彼は状況把握する為に神の眼を発動しこの世界の情報を読み取った。

「なるほど、魔法か・・・まあ使えるしいいのだが・・・むっ？
・・・吸血鬼か？追われている？・・・魔女狩りか・・・しかしあの吸血鬼は血の匂いがありしない？・・・最近なつたのか？すると・・・あれは被害者か？面倒だが助けるか？善行をすれば認めてくれるのか？まあいい、とりあえず助けるか。」

S i d e ???

今、私は正義の魔法使いに追われている。私は何もしていないのに勝手に賞金首にされて追われている。私はまだ使えないが魔法を放ってくるから面倒だ。だいたい魔法が無かったらただの中年のくせ
n「魔法の射手・連弾・雷の20矢！」

「ちいいいっつ！」

私は躲し切れずに直撃したと思った。だが直撃する時、魔法の射手は霧散した。光が消えた時、私の前に居たのは黒一色のコートに身を包んだ男だった。

S i d e レン

「・・・・・・・・・・」

「だっ！だれだ！？」

俺はあの後気配を消し奴等の後をつけた。あの吸血鬼が魔法を受け捌き切れなさそうだったため、精霊に干渉し魔法をかき消した。眼では精霊がちゃんと集まっていなかったからあの魔法使いは大したレベルでは無いのだろう。俺がそんな事を考えていると魔法使いAが攻撃してきていた。

「聞いてんのか！何故魔法が消えた？」

「・・・・・・・・どうでもいい・・・・・・・・何故こいつを追いかける？」

「そんなの決まっている！そいつが悪で吸血鬼だからだ？」

「・・・・・・・・何かやったのか？」

「私は防衛しかしていない」

そう吸血鬼が言った。俺は吸血鬼の魂の色を見た。魂の色はその者の本質が出る。善は白、悪は黒だ。しかしこの吸血鬼は若干黒っぽいがほぼ白だ。魔法使いは黒に赤だ。赤の場合、愚を表す。

「・・・・・・・・本当に正当防衛だけのようだな・・・・・・・・」

「おい！何をしてい「しね」ぐっ？！」

俺は並行世界から鋼系の技術を取り出し鋼系で魔法使い達の首元の死の線をなぞる。それによって魔法使い達は肉塊になった。

「オイッ！何をした？」

「・・・人に物を尋ねる時は名前からと習わなかったのか？」

「そうだな・・・私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。
お前の名は何と言った？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・レン・ルオカ・ギナ
ン力だ・・・・・・・・さっきのはただ死の線をなぞっただけだ。」

「死の線？」

「ああ・・・万物に宿る死を司る線だ。なぞればその部分が死ぬ。
また死の点という物もあってそれを突けばその存在が死ぬ・・・・
死の線や死の点はこの直死の魔眼でしか視えない・・・・・・・・それ
だけだ」

「・・・なんちゅーモンを貴様は持っているんだ？するとなんだ？
生きている物ならなんでも殺してやるってか！？驚きを通り越して
呆れるわつつっ！！！」

「・・・・・・・・じゃあな・・・」

「オイッ！何だその一人でやっているみたいな目は？私は巫山戯て

いる訳では無いんだぞ！」

なんか煩いな今の内に逃げるか

シュツ！！！！

「あつオイツ！待て？は・な・し・を聞けえー？」

俺は話を無視し逃げた

S i d e エ ヴ ア

あのレンというヤツは話を無視して逃げてしまった。しかし直死の魔眼だとつつつ？巫山戯ているのかっ！

しかし何故私を助けたのだろうか？私は真祖の吸血鬼で闇の魔法使いなのだぞ？全く・・・意味が分からん。・・・あの眼で私を殺せるのだろうか？もし殺せるのならば私はヤツは何故私を助けたのか？それにヤツは人間なのだろうか？なんか雰囲気というか風格とつかさうというものの次元が違って見えた。

とにかくヤツの事を調べ、今度こそ問いたださなければな・・・

四話 あれから約300年・・・

四話

あれから約300年・・・

sideレン

俺はあの吸血鬼事件の後、沢山の人間を見てきた。強欲な商人や生粋の武人に魔族のハーフなど、様々な人間を見たがやはりどこか俺を拒絶していて信頼のできる相手が人間では見つからなかった。そう、人間ではだが。

「おい〜レン〜まだ着かんのかあ〜？いい加減干からびそうだぞ？」

「ケケケ、御主人ソンナコトデハバッテタラコノ先ヤツテケネーゾ？」

そう、吸血鬼のエヴァンジェリンとその従者のチャチャゼロである。どこから嗅ぎ付けたかは知らんが日本で刀の作り方を学んでいる時に急に工房に入ってきて、詰め寄って来たのだ。その時に神である事と具体的な能力を説明した。しかしそれをきいたエヴァは信じてくれた。魂の色も青―純粹である。ここで補足しておく魂の色はオーラみたいな感じで見える。それはともかく、そういう経緯があつてエヴァがついて来る事になった。俺もエヴァのおかげで大分性格が変わった。と言われた。以前より親しみ易くなったといわれた。そついう事があつて今は砂漠を歩いている。

「なあ〜レン〜どうしても砂漠なんか居るんだ？暑すぎるわっつ！〜！」

「仕方が無い。正義の魔法使い達が追って来たのだからこの道を通るしか無いんだ。魔法世界に行くためにはな。」

「そこはアレだ！なんかお前の並行世界の能力でなんか無いのか？こつからパパッと移動出来るヤツとかな、暑さを緩和出来るヤツとか。」

「あるにはあるが具体的な場所のイメージが無ければ移動出来ないし、涼しくしたら砂漠が砂漠じゃ無くなるだろう？」

「ケケケ、レンモナカナ面白イ事イウジャネエカ？砂漠ガ砂漠ジヤナクナルトカナ。」

「ああ、そこに砂漠がある事に意味が有るんだ。」

「ほう？なるほど、つまりそんな事の為に暑い思いをしていたのか――！！そんな事に拘るな？」

結局、砂漠中を涼しくしなければ無くなった。

と言う訳でゲートに来た訳だが

「どうやってゲートを通るのか？私達の顔は正義の魔法使い共に知られているのだぞ？私はまだ幻術は使えんぞ？」

「……………あつ！」

「忘れていたんかいつ！！全く……どうするんだ？これじゃせっかくここまで来た意味が無いじゃないか！？」

「冗談だ。有幻覚を使う」

「有幻覚？」

「有幻覚は実態を作り出す幻術だ。本来ならば幻覚と有幻覚両方を織り交ぜて戦闘に使うのだが今回は、有幻覚で体を覆って使う。有幻覚であれば触れられても問題無いからな。俺も一応賞金首だからな、これ位はしないと。」

「……………もう驚かんぞ？驚きを通り越して呆れて来たぞ？」

「ケケケ、ナンテモノガ使エルンダヨ？スゲーナソレ。酒八出セルノ力？」

「酒は出せるが解いたら無くなるぞ？」

「チツ、使エネーナ」

「……………とにかくその有幻覚？でゲートを通るぞ？全く意味が分からんな。」

俺達は有幻覚を使い、ゲートを抜けた。途中チャチャゼロが喋って来た為誤魔化すのに苦労した。

さてここで俺の賞金首になった訳を話しておこう。俺は？がりを求めて沢山の人間を助けて行った。魔女狩りにあった者や不治の病に罹った者、山で遭難した者など数々の人間を助けた。しかし殆どの者は助けた俺を気味悪がったりした。中には命の恩人という感じで仲良くしてくれたが死んでしまった。それが噂として伝わり、正義の魔法使いに賞金首にされてしまった。二つ名は「黒の終焉」「黒の闇の殲滅者」「孤独」など、何とも痛々しい二つ名が付いた。賞金は村を殲滅したり山を消滅させたりしてしまった為1000万ドルという超大物賞金首となってしまった。しかし振り返ちにしていたら金より生きる事が大切なのかあまり来なくなった。そういう訳であまり良く無い状況になってしまった。果たして俺に平和な時は来るのだろうか？

五話 魔法世界中へ・・・

五話 魔法世界へ・・・

「魔法世界よ私は帰って来たー！」

「・・・・・・・・エヴァ」

「・・・・・・・・御主人」

「オイッ！なんだその他人ですよみたいなのは？あれはなんか頭に電波みたいなのがビビッと来たんだ？」

「・・・・・・・・末期か」

「・・・・・・・・ソウダナ」

「イヤイヤ違うからな？私は違うからな？頼むから違つと言ってくれー！」

「行くかチャチャゼロ？」

「・・・・・・・・ソウダナ」

「待てー！！！！置いて行くなー！！」

そんな事もあり今魔法世界に居る。まずは目的地である魔法技術都市アリアドネーへ行かなければならない。何故そんな事をしなければならぬのかと言うと、まずエヴァにはしっかり魔法を覚えさせなければいけない。エヴァは闇の吹雪位なら使えるがいかんせん経験や知識が足りずちゃんと使えないし、広域殲滅魔法も使えないからまずはしっかりと魔法について勉強しなければならないのだ。俺も前に居た世界では魔法が無く、神の眼で知識はあるが上手く使えないと言う状況である為にエヴァと同じくアリアドネーへ勉強に行くのだ。アリアドネーである理由は犯罪者でも受け入れるらしいからメガロメセンブリアで書物を盗むよりアリアドネーでしっかり勉強した方が良いと思ったからだ。そうで無ければアリアドネーなんか行かない。と言う事でアリアドネーで勉強している訳なのだが・

sideエヴァ

「お前はどんなチートなんだ？いくらなんでも3日で全魔法を覚えて尚且つそれを発展させるとか何処の天才だよっ！！」

「・・・・・・やっちゃった」

「オマエモツクツクチートダナ」

「私はまだおわるせかいの練習中なのに・・・・・・ずるいぞ！」

全くチートにも程があるぞ・・・並行世界の棚や神の眼が先天的なモノであるのは分かるが初めて使った魔法がそんなに早く覚えらるなんて巫山戯け過ぎているぞ。まあ知識があるのはいいいがそれを効率良く使えるなどバグっているのか？

「なあエヴァ・・・何がしたいんだ？確かに俺は何でも言
ったがさすがに眼の移植とかは嫌だぞ？」

「・ク・・・オーだ。」

「ん？何だ？」

「パクティオーだ／／／！！」

「そうか。別に良いが・・・方法は？」

「キスだ！」

「・・・は？」

「だ・か・らキスだ／／／？？」

「俺はロリコンじゃないぞ？」

「私は300歳だぞ？確かに体は成長していないが・・・それに・
・・・だし・・・」

「ん？何だ？よく聞こえなかったのだが？」

「好きだしなって言ったんだ！何度も言わせるな？私にとってお前
は白馬の王子様見たいな存在なんだ！追われている時に助け出され
る何て他にどうしろと言っただ！！」

「ケケケ、白馬ノ王子様ダッテヨ」

「うるさいチャチャゼロ笑うな！私は本気なんだぞ？」

私はレンに助けられてからレンの事を考える度に身体が疼き、胸がドキドキしてしまう事に気付いた。いつかそれが恋だと言う事に気付いた。それからというものの毎日夢にレンが出てきたりしてどうしようも無かった。レンと旅をするようになってからもこの気持ちを伝えようとする度にいつも魔法使いが来たり崖から落ちたりとタイミングが無かった。なので仮契約という形で伝える事にした。

sideレン

てな訳で、

「仮契約」（パクティオー）

「私が主でレンが従者だな。アーティファクトはなんだ？」

「代行者の加護らしい」

「とりあえず出してみろ。」

「分かった。来たれ」（アダアット）

アーティファクトをだしたら眼に三角形がたくさん並んだ模様が出た。俺はそれを神の眼で確認した。

「なんだそれは？」

「……このアーティファクトはさまざまなデメリットを無くせるらしい。」

「どういう事だ？」

「つまり直死の魔眼の脳への負荷や闇の魔法の負荷を無くしたり、消費魔力を半分にしたりとすぐ便利な常時解放型のアーティファクトだ。」

「凄いな・・・」

「凄イゼ・・・」

「エヴァはやらないのか？」

「私か？」

「俺ら是对等な立場だしな・・・やるか？」

「今はまだ良い。もう少ししてからだ。」

「そうか・・・まあ良い。とにかくまずはおわるせかいを使えるようにしろ。そうしたらアリアドネーから出るぞ？」

「分かった。次はどこへ行くんだ？」

「分からん・・・適当に行くだけだ。」

「ククッ、お前らしいな」

「違イナイゼ」

俺たちはこの日常が続くと思っていた・・・

あんな事があると知らずに・・・

五話 魔法世界中へ・・・（後書き）

ここでレンのパクティオーカードについて紹介します。

名前

LEN RUOCA レン・ルオカ・ギナンカ
GINANKA

称号

A solitary proxy（孤独な代行者）

色調

Transparent（透明）

星辰性

Universe（宇宙）

徳性

Absolutely（絶対）

方位

Center（中央）

アーティファクト

代行者の加護（A proxy's divine protection）

）

アーティファクトの効果は以下の事などができます。

- ・咸卦法の絶対成功
- ・闇の魔法に吞まれない
- ・直死の魔眼や万華鏡写輪眼などの負荷が無い
- ・消費魔力 1 / 2
- ・心を読まれない
- ・気絶、怯み、病気などにならない

です。どうでしょうか？

六話 開戦の狼煙・・・

sideエヴァ

そう、それは私がおわるせかいを使えるようになってからだった・
・

私はその時魔力を半分程使い切っていてすごくダルかった。私はおわるせかいがついに習得できた事に対して高揚感と習得にまで二ヶ月かかった事に対する嫌悪感をいだいていた。一般的な魔法使いと比べるとかなりのスピードなのだが。レンは私が練習している間、何やら咸卦法の上位互換の技を作っているようだった。しかし私はおわるせかいを早く使えるようになる為に、集中していたので詳しくは知らない。

「ううゝつかれたゝなんか眠たいゝ」

「ソノママ寝チマエ」

「ふみゅうもうむりいゝ」

「・・・・ホント二寝チマツタゼ」

くうゝくうゝ

s i d e レン

俺は咸卦法の改良をしていた。咸卦法は気と魔力を合成させて威力を上げる技能である。俺はふと考えた。魔法に咸卦法を付与すれば魔法も威力が上がるのではないかと。そこで俺は魔弾の射手に咸力を纏わせてみた。しかし魔弾の射手は木に当たる途中で爆散してしまった。これでも十分使えるが、求めていたのはこれでは無いんだ。俺は咸卦法とは何なのかと考えた。そして一つの結論にたどり着いた。魔力が赤色の色水だとし気を青色の色水とするとそれらを混ぜた紫が威力なのではないかと。魔力が多すぎると赤紫に、気が多すぎると青紫に、つまり爆発と言う事なのでは？と。俺はそこから魔法を魔力の代わりにすればいいのではないかと考えてみた。試しに魔弾の射手を気と合成し咸卦法を試してみた。すると魔弾の射手は形こそ変わらないが木に当ててみると木が消滅した。さらにその魔弾の射手を纏ってみたら手が闇の魔法をした感じに精霊化していた。つまり咸卦法はさまざまな魔法と組み合わせる事になる。また、魔力で出来た物質なら何でも良い事になるから、剣や技も取り込めると言う事だ。さらん「大変です！エヴァンジェリンがメガ口の魔法使いに捕まりました！」

「エヴァは自力で抜け出せそうか？」

「いえ、真祖封印の結界にかかっていて無理そうです！」

「……そんなに俺を怒らせたいのか……」

「後、10分で魔法衛士隊が来ますから足止めしておいてください。くれぐれも街は壊さないで下さいね?」

「構わないが……別……倒してしまっても構わないのだろうか?」

side アリアドネー学長

こんにちは、私はアリアドネー学長のサラと言います。三ヶ月程前にあの黒の終焉ことレン・ルオカ・ギナンカさんと闇の福音のエヴァンジェリンさんがここ、アリアドネーに来た。最初は警戒していましたが、最近では談笑する程の仲になっています。彼らは残虐な性格と噂で聞きましたが実際は友好的でもしるい部分もあるフレンドリーな方々でした。しかしアリアドネーにはメガロの魔法使いもいて、メガロに彼らの事を報告したようなのです。最初は問題無いと踏んでいたのですが、今アリアドネー郊外まで来てしまったのです。急いで魔法衛士隊を配置しようとしたのです。しかしいかにせん行動が遅れてしまいそうなのですが、レンさんが

「別に……倒してしまっても構わないのだろうか?」

と言われたので私は魔法衛士隊の配置をやめました。なぜならレンが何とかしてくれると思ったからです。

戦いは、今始まる・・・

1対1000000、正義とは・・・（前書き）

少し手抜きです

1対100000、正義とは・・・

sideレン

俺はアリアドネーに被害を出さない為にアリアドネー郊外で迎え撃つ事にした。あの後俺はまずエヴァをアリアドネーに転移させて眠らせた。今回の件ではメガロは俺の逆鱗に触れてしまった。奴らは勘違いをしている様だから勘違いを正さなければならない。

この程度の戦力で俺たちを倒せると思っている事を・・・

「闇の福音！！黒の終焉！！正義の名の下に貴様等を断罪しに来た！」

「プチッ」断罪だと・・・・・・・・」

「貴様等は悪を行いすぎた！だから正義をもって断る」正義とは・・・
「何？」

「正義とは・・・人間が好き勝手する為の免罪符でも他人に押し付ける物ではない・・・個人が信じる物だ・・・お前たちは何故正義を盲信する？お前たちはなにをもって正義を正義とするんだ？」

「そんなこと決まっている！そこに悪があるから正義があるのだ？だから貴様」話にならん・・・仕方がない・・・実力行使だ・・・・」総員戦闘準備！！！」

「咸卦法・真！約束された勝利の剣！兵装融合！

ライト・オブ・ビクトリー
右腕の絶対勝利！！！」

咸卦法・真の真骨頂はその速攻性と威力にある。まず闇の魔法みたいに時間がかからない。そして咸卦法の元々の性質により威力の倍増がある。そしてこの右腕の絶対勝利は約束された勝利の剣の性質である光の粒子による砲撃が右腕のパンチによって発動される。つまりパンチする度に敵に粒子砲が襲いかかるといふ訳だ。ただし魔力をそこそこ持ってかれるのだが・・・雑魚相手にはすぐ使える訳だ。

「うおおおおおおお ジェノサイド・ライト 右腕無双！！！！！！！！！」

「がああっ！」

「うわあああ」

「正義が負ける筈は・・・」

殴りまくれば無問題

こうしてメガロメセンブリアは独りの男によって返り討ちにされた
のだった・・・

八話 アリアドネーからの旅立ち・・・・・・・・一人で

S i d e レン

正義の魔法使いを殲滅した後アリアドネーに帰った。エヴァに少し怒られたがその後、咸卦法・真について問い詰められた。闇の魔法に近いモノと言っておいたがそのまま固まってしまったので無視してサラの下へ行った。

・・・・・・・・チャチャゼロがエヴァの肩で「ケケケケケ」と言い続けていた事に少しビビったのは内緒だ・・・

S i d e サラ

私はあの戦いを見た後、自分の執務室に来ていました。そこで私は始末書を書いていました。レンさんが暴れ過ぎたのが原因です。アリアドネーの郊外とは言え地面が抉れていたり、木々が倒れていたりとやはり書かなければならないのです。レンさんもう少し加減して欲しかったな・・・と思いつつ始末書を書いている時にレンさんが部屋に入って来たのです。

「・・・サラ、少し良いか？」

「レンさん？良いですけど何の用ですか？」

「そろそろアリアドネーを離れようと思ってな・・・・・・・・」

「!??・・・何故ですか？」

「今回の事は俺やエヴァがアリアドネーに居たからメガロが攻めて来たんだ。また来ないとも限らない。」

「そんなの返り討ちにすれ「それに」っ！」

「お前たちは俺たちを許容できるかもしれないが次の世代・・・お前たちの子や孫はいつか恐怖し、敵対する事になってしまう。そうならない為に俺たちはアリアドネーを出て行くんだ・・・」

「っ?・・・分かりました。しかしアリアドネーが今後危機に瀕した時、再びここへ訪れてアリアドネーを救うという事を約束して下さい!!!」

「・・・わかった。例えばそれが100年後でも1000万年後でもそれを守ると誓おう・・・別れるのは辛いがいつかはこのような日が来るんだ・・・また会える事を祈っている・・・では・・・さらばだ!!」

彼は旅立って行った・・・

とある幼女の吸血鬼を残して・・・

「全く・・・レンのヤツ遅すぎるぞっ！一度サラの下へ行つてみるか・・・？だが入れ違いになる可能性も・・・しかし・・・」

「案外忘レラレテイルノカモ知レネーナ」

果たして吸血鬼^{エヴァ}は代行人^{レン}と合流できるのだろうか・・・

八話 アリアドネーからの旅立ち・・・・・・・・一人で（後書き）

少ないし中身も薄っぺらいです

テストが近いのですみません

感想、意見いただけると作者はがんばれます

作者の五大栄養素には感想、意見が含まれています。

九話 忘れ物？でも取りに行かないVS雷纏いし狼竜・・・

sideレン

俺は今、魔法世界の森林の溪流の近くにいます。何故ここにいますかと言っとそれはエヴァから逃げて来たのだ。エヴァから逃げた理由、それは長い間近くに居ると大切な物の価値観が分からなくなる。

要は、

最近エヴァからの扱いが酷かったから俺がどれ程重要な存在であるかを噛み締めてもらおう！

という訳である。

彼女はいつもパシらせたりパシらせたりパシ（ry

とにかく人使いが荒いのである。このままではエヴァが残念な娘になっってしまう可能性がある。そこでエヴァから離れた訳だが・・・

「少し来すぎてしまったな・・・」

今、迷っている。

仮契約カードで連絡を取ろうと思ったのだがここで致命的な弱点が発覚した。それは念話ができない事である。並行世界の棚でも何故

か念話だけはする事ができないのである。それで今迷っているのだが……

「（……この近くに一体何があるんだ？さっきから大量の魔力が一点に集まって来ている？こんな事が出来る生命体はこの世界にはそうそう居ない筈なのだが……）」

先程から普通じゃあり得ない程の魔力が集まりつつある。それこそ真祖の吸血鬼であるエヴァすらも軽く凌駕する程の魔力が。故に彼は気付かなかった。

それが既に目の前に居る事を……

『この様な所に何の用だ人間？』

それは青白く光る竜のような狼だった……

side???

私は確か溪流にいた筈なのだが急に景色が変わって見たことが無い溪流へ来ていた。突然の事で何が有るかわからない為雷光虫を集めて警戒する事にしたのだが・・・

雷光虫では無く別の何かが集まってしまった

私がそんな事を考えていると人間？が歩いて来た。私はここがどのような場所か知るべくその人間に話しかける事にした。

sideレ

喋った？

「迷ったのだが・・・」

「迷った？それでは分からんか・・・ではここへ来てから腹が減ったままなのでな？その血肉頂戴する??」

「っ!!」

そして1匹の竜と代行人がぶつかる・・・

10話 対雷狼竜・・・

先に言わせてもらう

「主、こちらでは無いでしょうか？」

「さあな？」

どうしてこうなった・・・

~~~~~

半日前・・・

sideレン

光を帯びた竜は雄叫びをあげながら雷の精霊を集め出した。

『溪流の王、ジンオウガ参る？』

ジンオウガが雷を放出した。俺はそれに対応する時間があまり無かった為ダメーシ覚悟で迎撃するあことにした。

「（咸技・流！）」

威技・流とは威力を前方から後方へと放出する事で攻撃を受け流す技である。雷や磁力など実体が無い物まで受け流せるので『瞬間的』な防御には使えるのである。瞬間的という理由は空気まで受け流すから長時間使えないし、威力を垂れ流すから燃費も悪いし後ろに仲間がいた場合受け流した後が大変なので使い所が限られるのである。

「くっ！ならば【滅竜装】雷竜！」

竜装は竜の力を鎧や武器として顕現するモノである。対して滅竜装は竜を打ち倒す為に自らに竜の性質を取り込む魔法である。つまりところ目には目を、歯には歯をということだ。

「雷竜の雷吼！」

『雷衝！』

互いの雷を纏った砲吼がぶつかる。最初は拮抗していたが威力が反発して爆風をおこした。それにより砂煙が発生した。砂煙が晴れた時には・・・

『いない・・・・・・だと！？』

「雷竜の突角！」

レンは後ろから雷狼竜に渾身の蹴りを放った。レンは砂煙が消える前にスキマを開いて雷狼竜の背後に回ったのだ。奇しくもその背骨

を狙った一撃は直撃コースに入った。しかし雷狼竜は野生の勘とい  
うかなんというかすんでのところで背骨に当たるのは避けられた。  
背骨にあたれば時間が経てば治るものの暫くは動けなくなりトドメ  
をさされるのは必至だからだ。雷狼竜は脇腹が少し挟れたが攻撃さ  
れた時雷を放出しレンにもダメージを与えた。しかし既に互いは満  
身創痍である。

「・・・次で決める」

『・・・ああ』

・・・・・・

「雷竜・奉天戟！」

『グオオオオオオオオオ！』

キイイイイン

甲高い音と共に雷で構成された奉天戟と雷を纏った突進がぶつかっ  
た。

残っていたのは勝利を確信しほくそ笑む男と倒れた竜だった。

~~~~~

その後俺は溪流を離れ彷徨っていたのだが、ジンオウガが付いてきて「その強さに惹かれた」と言って旅を共にすることとなった。ジンオウガにリオという名を与えた。理由は特にない。そして今は・・・

「主、さすがに手がかりも無く街を探すのは無謀と思われます。」

「近くに人の気配はあるのだが・・・」

迷っていた

S i d e 永遠幼女吸血鬼

「むっ？レンが新しい女と居る気がするぞ！」

「ゴ主人エ……マタカヨ……」

10話 対雷狼竜・・・（後書き）

読みにくいかもしれません。

レベルが低いので

上手くかけているか分からないので

感想・意見もらえると嬉しいな～と思っています。

十一話 平穏と試練

sideレン

俺はライと共にヘラスの村を周っていた。エヴァは生きている間にはまた会えるだろう、ということで探すのは諦めた。自分から迷子になったのだが。現在、ヘラスではまともな医療機関が村に存在しないので治療しにヘラス国内を転々としている。たまにメガロとの国境沿いの村だと正義の魔法使いが村人に「服従しろ」などと

巫山戯た事を言うてくるのでたまたま奴らの魔法が暴発したり落雷が直撃したりなどしている。なのでヘラスには「救済者」メガロからは「死神」と呼ばれている。しかし最近俺に縋る者たちが多すぎる気がする。だから次の村に住もうと思い今、村長の家にいる。

「別に構わんが・・・お主何者じゃ？わしはこう見えても若い時は帝国の兵士をやっておつての？何となく分かるのじゃが・・・雰囲気がよく分からないのじゃ。大体は善人だったり悪人だったりするんじゃが・・・こう・・・何と言っていいか分からないんじゃ。悪でもなくまた善でも無い。お主・・・本当に人間・・・いや・・・存在しておるのか？」

「・・・まあ幼少の頃ある事があつてな・・・メリットは医療の心得があるから医者になつてやる。最近村を治療して回っているのな。あとは用心棒ぐらいだ。一応、賞金首なのでそれなりに戦え

るのだが……どうだ？」

「ふむう……（村には医者が居らんからのう……しかし賞金首とはな……悪い者でも無さそうじゃしのう）まあ、いいじやろう」

「ありがたいな。森の近くに建てるが良いか？」

「できれば森を調べて貰えると助かるのじゃが……どうかの？近頃盗賊が住み着いてアジトがわからなんだ。討伐しとくれ」

「造作も無いな。」

「頼んだぞ……死ぬんじゃないぞ？」

このやりとりの後、森から悲鳴が飛び交ったそう

十三話

作者の謀略〜KING?CRIMZON〜

十二話 作者の謀略〜KING?CRIMZON〜

S i d e レン あの後俺達は森の入り口に家を建てた。ライと協力し木材を作り出し、並行世界の棚を久々に使い外見はログハウスだが強度は千の雷数発食らってもびくともしないという不思議性を備えた家と成った。

村に住み始めて五年程経った。最近では医療の仕事以外にも畑仕事や魔物退治などにも取り組んでいる畑仕事や魔物退治をしている時は医療のスペシャリストとしての能力を持つ分体を置いてきている。しかし医療に特化しているため連絡や戦いなどは全く出来ない。最近ライが戦闘時黒くなり赤黒い電気を纏っている事がある。何なのだろうか？

ライの変化について詳しく分かったのは住み始めて二百年後の事だった。戦いの最中ライが黒い雷を纏って攻撃した時の事だった。敵は龍だったのだがその龍はスタボロになったが一瞬でその傷が全て塞がっていた。攻撃も倍以上の威力も見せ、硬度もダイヤモンド並に硬かった。別の生物にやると、逆に弱くなっていた。このこと

から赤黒い雷は竜の因子を持つモノに恩恵を与え、竜ならざるモノには凶刃となる不可思議なモノだった。村では長生きしていた村長が亡くなったらしい。

ライが寿命で死にかけた。

十三話

作者の謀略〜KING? CRIMZON〜

(後書き)

少なっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041y/>

神の代行人ーその者の行く道はー

2012年1月12日19時06分発行